

## 認知症の在日高齢者の生活と言葉の中の記憶

### － 韓国人支援者がいることの意味 －

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会臨床クラスター  
尹 榮淑

本研究では、認知症在日コリアン高齢者が表現することや状況を理解しつつ対応することによって、私、周りの利用者たち、職員たちとの関係がどのように変わっていくのかを、日本人・韓国人・在日コリアンのスタッフが利用者の文化や生活習慣に配慮したサービスを提供しているK施設でフィールドワークをしながら、参与観察を行った。認知症在日コリアン高齢者の日常生活の活動に研究者が加わり、現場において起こっている、対象者と観察者、家族、他の利用者、職員の間会話や行動などを丁寧に記録し、分析を行った。

結果・考察として、第一に、二カ国語を用いて行われるコミュニケーションにおける利用者と援助者の関係に関しては、筆者が韓国人女性として対象者の馴染んできた文化、食生活について理解しながら対応したことにより、対象者自身の家族、息子、食べ物、友達などのことを一緒に話したい気持ちが沸き起こってきたと考えられ、二カ国語を使う対応だけではなく、歴史や文化を理解しながら、対象者が求めていることに常に耳を傾ける援助を通して二人の関係は親密さを増す方向に変化したと考えられた。第二に、共同生活の中で対象者と他の在日コリアン高齢者の関係の変化として、その人の根深い恨みに関する語りに対して、対象者は、その恨みを慰める気持ちを表現した。対象者も自分の心を伝えていたことは、韓国語の言葉のやり取りによって他の利用者との関係が肯定的に変わったことの反映であると考えられる。また、言葉として引き出されている対象者の過去の記憶に関しては、過去の対象者と現在の対象者が今ここに「共存」して「再現」されていると理解することができた。最後にK施設のもう一つの意義は、故国に帰ることができない在日コリアン高齢者である親が、K施設で余生を送っていることで、家族にも安心をもたらしているということだ。K施設は在日コリアン高齢者だけでなくその家族をも支えているのである。